

の消費されぬ（すなわち繰延べられた）購入額に、株式その他の資産純増分を加えたものである。

(d) 企業の場合には資産を償却資産（建設、設備）と棚卸資産（在庫）に區別し、前者は直接に販賣によって収益をあげることを目的としない使用財であり、後者すなわち在庫は販賣財である点において概念的には區別ができる。しかし、個人にとってこの區別は必ずしも明確でない。というのは、個人が企業とことなるのは、その資産のすべてが使用財である点ならば明らかだが、そうすると個人にとって資本的支出とは何かという間に再び出会う。すなわち、個人にも企業的な——収益を目的とする資本支出を認めるとしても、資本的と非資本的との境界線は企業の場合ほど明確でないから、減價償却について不公平がおこる可能性がある。課税の措置は便宜によるから、その決め方によっては不公平をまぬかれないのである。

(e) 貯蓄に課税するのは二重課税だという議論は、ジョン・ステュアート・ミルが主張して以来、フィッシャーが力説したところだが、従來の貯蓄の定義が明確でないので多くの議論は説得力を欠いている。もし、貸借関係を考慮にいれなければ、一方に負債が増加し、それによって貯蓄が増加する場合などをも貯蓄増加と見なすおそれがある。貸借関係を考慮に入れる点において前述の支出税の様式は正しいし、従來の貯蓄概念の不明確な点を是正できる。しかし、これを實際の課税上の措置として用いるとき、はたして個人の貸借関係の申告がどれだけ信頼できるかが問題となる。カルドアの支出税の提案のうち、もっとも缺點というべきはこの貸借関係の申告の信頼性にある。一時点の預金残高の証明は入手しうる。資産の購入販賣の証明もできる。しかし、個人間の貸借関係を明らかにする手掛りは殆んどないといっているからである。

(f) 支出税にせよ、貯蓄について特別の措置をする所得税にせよ、結果としては貯蓄を擁護することになる。カルドアは公平の見地から、資本利得に課税されぬ財産所得の方が有利なのは正しくないというが、支出税において比例説とすればかえって逆進的になるおそれがある。カルドアの主張は公平の見地よりもむしろ經濟發展に移動しているようである。「課税と經濟進歩」を論ずる章で、その企圖は明らかであって、いかなる經濟進歩も投資の源泉としての貯蓄の上昇の他にはない。インドのマハラノービスの後進國の資本蓄積論を援用しているのもこの企圖のあらわれである。

(g) この個人に對する課税について、課税と危險負擔、課税と勤勞意欲の問題は、従來取扱われる仕方がたんに

厚生の見地からのみで經濟發展に連關して論ぜられることが少ないが、この點もカルドアの思想は經濟進歩の視野から見なおし、それゆえに支出税を強調するのであって興味深い。

(h) 個人に對する課税に比して、企業に對する課税の効果はどうか。企業利潤に對する課税のうち轉嫁できぬものは、それだけ企業の蓄積意欲を措害し、資本蓄積にとって悪影響があるかのごとき議論は日本の特別措置にもあらわれているが、カルドアの統計による解明の結論をいえば、イギリスでは企業に對する課税は企業の固定設備の縮少をもたらしことなく、Redfernの推計では税の増大にもかかわらず、企業設備は増大している。これは配當の低下によって償われたのであって、企業税の直接効果は企業の蓄積に對してではなく、株主の配當減少という影響によって個人貯蓄に對して好ましくないだけである。この點は國によって異なり、株主の勢力によって左右される。個人税と企業税との間の公平の問題は、個人所得と企業所得を兩一のダイメンションで考える従來の考えに反省をうながす。

もちろん、カルドアは支出税が所得税に代るものとするのではない。むしろ、併用による補充を考えているだけである。この書の含蓄はたんなる租税論ではなく、所得、支出、消費、貯蓄、資本形成について従來の概念を改めて反省する上に甚だ有益であると思われる。

（高橋長太郎）

マクシミリアン・リュベール

『カール・マルクス書誌、附フリードリッヒ・エンゲルス著作目録』

Maximilien Rubel: *Bibliographie des oeuvres de Karl Marx avec en appendice un répertoire des oeuvres de Friedrich Engels*, Paris, 1956, Marcel Rivière, 272 p.

## I

カール・マルクスの数多い著述を網羅した著作目録がいままで印刷に附されなかったというのは、まことに奇異なことである。いままで『マルクス書誌』として編集されたものには、社會主義書誌學者として有名であったドイツ社會民主黨文庫の司書ドラーンが前大戰後に作成したものがあるにすぎない<sup>1)</sup>。ドラーンの手記は當時短

1) Ernst Drahn: *Marx Bibliographie. Ein Le-*

時日のうちに品切れとなったので、彼は Gustav Mayer の指摘によって訂正を加えた第2版を準備し、そのさい Heinrich Cunow と Werner Sombart のすすめで初版に比して第2版を擴充し、第1分冊にはマルクスの生涯と著作を収め、第2分冊では書簡を日付順に短かい内容の摘記を添えて排列し、第3分冊ではドイツ語によるマルクスの傳記書、ドイツ語によるマルクスの科學的業績にかんする著作を掲げる計畫であった。それぞれをとっていてもいかに勞力を要する仕事であるか容易にわかることであるが、結局ドラーンは第2版の第1分冊を發表しただけで、第2分冊以下は世に出なかった。この第1分冊は當時としては高い利用價值をもっていたが、もちろんそれまで未發表の遺稿を掲げず、また個々の著書の記載も簡單であり、マルクスの著書で20世紀初頭までに出版されたものを詳しく知るためには、有名な Stammhammer の『社會主義・共產主義書誌』<sup>2)</sup> が依然として權威あるものとされていた。

ドラーンの手記以後、ドイツでこの種の編集事業が進められたかどうか不明であるが、1927年くらい Marx/Engels Gesamtausgabe (MEGA) を編集・出版しはじめた D. Rjazanov は、編集計畫を進めるに當ってマルクス書誌を作成したにちがいない。しかしわれわれの知る限り、このような書誌は印刷に附されたことはない。その後 Rjazanov は政治的事件に連累しマルクス・エンゲルス研究所々長を辭し、彼に代った Adoratskij が MEGA の編集責任者となったが、1933年ナチスの政權把握後、ドイツで MEGA の刊行は不可能となり、モスコウで出版がつづけられた。モスコウに出版地が移ってからは數冊が1930年代に出版されたのみで、ドイツ語版 MEGA は中絶した。この間 Rjazanov が大部分を編集したと思われる『マルクス年譜』<sup>3)</sup> がモスコウで出

*bensbild Karl Marx' in biographisch-bibliographischen Daten.* Charlottenburg, 1920, Deutsche Verlagsgesellschaft für Politik und Geschichte, 59 S. Zweite, verbesserte und erweiterte Auflage, Erstes Heft, Karl Marx' Leben und Schriften. 1923, 29 S.

2) Josef Stammhammer: *Bibliographie des Socialismus und Communismus.* Jena, 1893, Gustav Fischer, IV, 303; Bd. II, *Nachträge und Ergänzungen bis Ende des Jahres 1898*, 1900, IV, 403; Bd. III, *Nachträge und Ergänzungen bis Ende des Jahres 1908*, 1909, IV, 473.

3) *Karl Marx/Chronik seines Lebens in Einzeldaten.* Zusammengestellt vom Marx-Engels-Lenin Institut. Moskau, 1934, Marx-Engels-Verlag, 464 S. (ロシア語版 1935. 廣島定吉譯『カール・マル

クス年譜』。1956, 改造社)

版されたが、これにマルクスの著作目録が附されている。しかしこれは邦譯書による限り簡單なものにすぎない。わが國では改造社版『マルクス＝エンゲルス全集』別卷(1933年)のなかに向坂逸郎氏の編集された著作年表があり、おそらくこれがわが國でひろく利用されてきたと思われる。これは著作と書簡に分れ、エンゲルスの分もふくめ年次順に排列されている。

## II

以上はすべてその編集された時期に制約され、當然不備を免れないが、このたびフランスで出版されたリュベル氏編の書誌は、もっとも網羅的であり、書誌編集上必要な十分な手續を経た信頼すべきものである。リュベル氏その人については紹介者は知るところないのであるが、戦後社會主義倫理についてマルクスの著作から拔萃した編著があり、近くマルクスの傳記を公刊する模様であり、論文はかなり發表している。

本書の構成はつぎの通りである。序文—カール・マルクスの著作の諸版にかんする歴史的覺書 24 ページ、全集・論文集・定期刊行物一覽表および略稱 6 ページ、遺稿および最初の重版公刊年表(折込み1葉)、第1部 著者の生存中および死後に公刊された著作 158 ページ、第2部 書簡 32 ページ、第3部 未編集著作 8 ページ、第4部 疑わしいもの 7 ページ、附録エンゲルス著作目録 58 ページ、人名索引 12 ページ。

序文は3つに分れ、最初の部分で編者はマルクスの生涯を 1837—1849, 1849—1861, 1862—1883 の3つの時期に分けて概観し、第2の部分で彼の文獻上の遺産について説明する。ここではマルクスの死後、エンゲルスが『資本論』第2巻をはじめ、その他既刊の著書の新版を準備・公刊した事情が多く、典據を示しつつ明らかにされる。ついでエンゲルスの死後、Eleanor Marx-Aveling, Karl Kautsky, Eduard Bernstein, Franz Mehring の同じくマルクスの著作出版についての活動の歴史が述べられ、Rjazanov と MEGA についての説明がつづく。ここで注目すべきは Rjazanov 以後のソヴェトにおけるマルクスの著作出版に觸れている点である。最後の部分はこの書誌の計畫と方法の説明にあてられているが、編集上の技術的な點は別としてこれは本文の紹介のさいに譲る。

本文の第1部はマルクスの生存中および死後發表された著作を著述の年次を追って排列する。1835年にはじまり 1882年に終る全著作は一連番號をつけられ、全部で

757 となっている。番號は定期刊行物に掲載された一篇ごとにも附され、例えば New York Tribune への寄稿も 1 つづつ数えられている。各件名（番號を附されたものをこう呼んでおく）の記載の方法はつぎの通りである。番號のつぎに原題名がマルクスが書いた國語で挙げられ、次行にそのフランス語譯がくる。つぎにそれがはじめて發表された刊行物名、掲載範囲ページ、刊行年月日、さらにこれが後に著書に收められたばあいは、その書名、掲載範囲ページ等、また外國語に譯されているものは以上に準じた記載があり、最後に各件名に最小 3 行以上の説明が附されている。以上は論文等の記載方法であるが、著書の一例として“Zur Kritik der politischen Oekonomie”をとってみよう。記載事項を列挙すると、書名、刊地、出版者、刊年、ページ、版型、正誤表、カウツキー編第 1 版、第 2 版、第 11 版について同様の記載。以下數種のフランス語譯書が掲げられる。説明文には發行部數、本書成立について参照すべき書簡の指示、ロシア語、英譯（正確な書名の記載なし）のあることなどが記されている。ただここで不思議なのは 1934 年刊のモスコウ研究所版、さらには戦後の Dietz 版を挙げていないことである。“Grundrisse”などが件名となっているところからみると、當然挙げられて然るべきと思うが、欠けている。總じて外國語譯もフランス語に重點が置かれているが、本書がフランス人によって編まれた以上は當然かもしれない。なおそれぞれの論文がはじめて發表された定期刊行物、全集、論文集、その他の出版物については、本文中では略稱が用いられているが、それらはさきに挙げた一覽表に掲げられ、全部で 42 種に及び、新しいものでは“Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie”も入っている。

第 2 部の書簡はその宛名人のアルファベット順で排列され、人數は 121 名に上る。各人ごとに書簡の數、日付乃至期間、發表された出版物、書かれた國語、宛名人の簡単な説明が掲げられているが、もちろん書簡の内容には觸れる餘地は少ないので、大體において書簡の發表された出版物を検索するのに役立つに止まる。しかし部分的には内容を示したものもある。第 3 部は未發表の著述で遺稿に當るものだが、これは本書中もっとも興味あるものであろう。リュベール氏はアムステルダムの社會史國際研究所の藏するマルクスの原稿のリストや前掲の『マ

ルクス年譜』その他によってマルクスの原稿、ノート、手帳を分類しているのであるが、この編集は同氏がモスコウの研究所と連絡がとれなかったために十全を期しえなかったようである。第 4 部は Dubiosa と題されるもので、無署名のもの、マルクスが署名していても疑わしいものなどを集めており、『革命と反革命』が大きなものである。

以上本文の内容を簡単に記載の方法を中心に紹介したが、なにぶん目録なので言葉では十分に本書の詳細を具體的に説明しつくせぬうらみなしとしない。本書の不十分な點といえば、さきにも觸れたようにとくに著書的外國語譯についてフランス語譯を優先せしめ、各國語の各版を網羅しておらず、また原典で現在もっとも標準的な版をすべてについて挙げていない點などであろう。しかしリュベール氏がフランス國內の圖書館、研究所のみならずブリティッシュ・ミュージアム、アムステルダム社會史國際研究所を検索し、ニュー・ヨークからマイクロフィルムをとり寄せ、厩大な資料を参照しつつ勞力と時間を要する煩瑣な仕事をやりとげた努力には敬意を表せざるをえない。本書はドラーン以後の社會主義書誌における劃期的業績といってよい。なお一昨年東獨でマルクス・エンゲルスの著書の初版書誌<sup>4)</sup>が出たが、これを本書と並んで用いれば双方の價値が高まることと思う。

最後に附録のエンゲルス著作目録は、各件名につき説明を缺くが、記載はマルクスのばあいに準じており、各國語譯、新版などの記載が省略されているちがいはある。附録である以上やむをえないが、この點はエンゲルス死後 50 年記念としてスイスで出版された下掲の書物<sup>5)</sup>に附された目録でかなり補われよう。

(杉本俊朗)

4) Marx-Engels-Lenin-Stalin-Institut beim ZK der SED: *Die Erstdrucke der Werke von Marx und Engels. Bibliographie der Einzelausgaben.* Berlin, 1955, Dietz, 64 S.

5) F. L. Seewann: *Bibliographische Angaben über Veröffentlichungen von Schriften von Engels und über Engels*, S. 333—351, Friedrich Engels. *Der Denker. Aufsätze aus der Grossen Sowjet-Enzyklopädie. Hauptdaten aus dem Leben. Bibliographie.* Basel, 1945, Mundus-Verlag.